

書評

長井苑子 著

間質性肺疾患の外来診療

公立陶生病院／呼吸器・アレルギー内科

近 藤 康 博

「間質性肺疾患」多くの読者はこの病気の名前は知っていても、どんな病気？ どう診療するの？と、尋ねられると、はたと困ってしまうのではないだろうか。間質性肺疾患は、有効な治療がほとんどない難病も多く含むため、専門家をも悩ませる厄介な病気である。かくいう私も、この悪女のような悩ましい病気に心奪われ、深みにはまり、不惑の年を迎えても、相も変わらず悩める少年のごとく葛藤しているのである。

このような「間質性肺疾患」に対する実践的解説書として作成されたのが本書である。本疾患に20年以上も携わってこられた長井先生の、情熱、臨床経験、知識・エビデンスを駆使しての力作で、先生の多くの難病に苦しむ患者さんに対する深い愛情からうまれたものである。先生の属する京都大学間質性肺炎グループの世界に誇る臨床データも、随所にちりばめられている。私自身、本書から多くを学ぶとともに長井先生の難病に立ち向かう医師としての姿勢に強い感銘を覚えた。

本書は、日常臨床に携わるプラ

イマリケア医の方、はじめて間質性肺疾患の患者を診る研修医の方、さらには、呼吸器専門医、なかでも間質性肺炎に興味がある先生方、いずれの方にも満足をもって読んでいただける良書である。単に、外来診療の手引き書にとどまらず、充実した文献リストも備え、最新の知識をまとめよく吸収することも可能である。本書を一読すれば、呼吸器専門医以外の先生方にも、外来診療において、間質性肺疾患の可能性を個々の患者からどのようにして引き出し、それを臨床画像あるいは、臨床画像病理的に診断していくかの道筋とノウハウが、容易に理解可能であろう。

通常、このような教科書は、分担執筆となることが多いが、本書は長井先生一人により書き下ろされている。ご多忙な先生が、本書を作成するには大変なご苦勞であつたと推察されるが、そのおかげで、本書では「患者に不利益を被らせない」という著者自身の強い臨床姿勢に基づく診療方針が終始貫かれた内容を維持することが可能となっている。

さらに、豊富な臨床経験と卓越した見識を持つ著者ならではの、「経過観察については、“治療しないという治療方針”の意義についてよく説明する」「間質性肺疾患領域では、症例蓄積による臨床経験が、知識とほどよくバランスがとれてはじめて、現実的で妥当な、患者にとっても不利益とならない管理治療方針が決定されることを強調したい」「組織診断をしても、治療導入の時期とその種類については、臨床的判断なしではできない」といった小気味のよい名言に随所に触れることができる。

また、付録の厚生労働省申請書類、治療継続のためのピンポイント・アドバイスなど、痒いところに手が届く内容となっている。さらに、欄外のコラムからは、患者さん一人ひとりを大切に著者の人柄や、考え方に触れることができる。

日常臨床では、間質性肺疾患の多くは見逃され、また、見つけれられても適切な診療がなされていないのが現状ではないだろうか。本書が多くの臨床医の先生方の手に届き、「間質性肺疾患」の診療レベルの改善、ひいては患者さんの利益につながることを期待したい。

〔B5 頁184 2007年 定価
5,985円(本体5,700円+税5%) 医学書院刊〕

* * *